



CASSIOPEIA FIVA

真四角な箱を美しく包む 1mmの淡く微妙な曲線

右手の親指で操作するサムパッドと、対になった左手で操作するクリックボタン。立ったままでも使えるこの操作法と、A5サイズの中にパズルのように密に詰め込まれたメカとが、CASSIOPEIA FIVAのデザインを方向づけている。

流行にマッチした クリーム色にも期待

カシオデザインセンターの奈良勝弘氏は、1mm以下のサイズを巡る攻防を、技術部と繰り広げた末、下弦の月を思わせる美しい表面処理と、全体に続く微妙な曲線とを実現した。奈良氏自身、「プロダクトというよりグラフィックス的だっ

た」と語る、このほんのわずかな凹凸と周囲を包むかすかな丸みとが、FIVAを実際より小さく見せることと、ただの箱に見せないことに大きく貢献している。

彼のデザインは、「最初から決まっていたほとんど変えられなかった」というボディを、ていねいに柔らかに包み込んでいるし、他のパソコンと異なる位置に配されたクリックボタンの周辺もそつなくまとめられている。ヒヨコの足跡のように少し先の広がったLEDなど、細部にはほっとさせられる遊び心も見受けられる。優等生過ぎる感じは残るが、全体としては名が響くような飽きの来ないデザインに仕

上がっていると思う。

惜しむらくは、ボタンの下に帯状に敷かれた岩シボの質感部分だ。このソリッドなテクスチャーは周囲とあまり調和しておらず、時代にマッチしない印象を与えてしまう。逆に、開発段階に検討されたという、青紫をクリーム系に替えたバージョンの方が新鮮味があるので発売をぜひ期待したい。

Quality、Sofistication、Simple、Eleganceという言葉がFIVAのデザインコンセプトだったという。最後の1つを除いては完全に具現化されていると僕は感じている。「優美さ」は、これからのすべての日本の工業製品の課題と言えるだろう。



ギリギリ持ち歩けるサイズの中に、妥協しない操作性と飽きのこないデザインとが共存する。



アクセントとして採用された岩シボのテクスチャーは残念ながら周囲と調和していない。

PROFILE ●さかい としひこ

サカイデザインアソシエイツ代表。91年通産省選定グッドデザイン賞、94年アビターレイルテンボ展出品（伊）、95年1995デザインの現在展出品（加）ほか。